

さらに高林氏は報告者に対して①医療専門職者集団の既得権の状況や、②生徒や家族、地域の受容について質問をした。まず①について、増田氏は当時のイギリスでは新たに任命された学校に従事する医師と、長い歴史を持つ救貧法の医師との間での既得権の問題が浮上したことを指摘した。しかし七木田氏は日本では医療界から文科省の傘下に自ら入り新たなポジションを見出した医療専門職の存在をあげた。たとえば学校看護婦は戦後の養護教員として再誕生し、「保健科」の枠組みにあえてアプローチしたと述べた。このような両者の回答について、イギリスの学校ソーシャルワーク史を研究する立場から筆者は以下に補足したい。すなわち学校に従事する医療専門職者は、医療界では新しい職種であり弱い立場であった。そこで彼らは学校とつながることで学校医療の専門職としてのテリトリーを確保し、彼らの職務上のアイデンティティや既得権の問題を収めた。しかし日本とイギリスでは彼らの制度的な位置づけは少し異なる。イギリスでは学校組織の外部の専門職者として配置し、学校には彼らと接続するための委員会を設置した。これに対し日本ではたとえば養護教諭のように新たな教職員として彼らを配置し、教師が生徒と家族を「丸がかえ」する独自の学校文化が構築されたことが指摘できる。両報告において教師が子供の身体状況を把握する重要な役割をもつことは共通しているが、このような制度上の違いが現場にどのような違いを生むのか、もう少し踏み込んだ議論を期待する。

次にコメンテータの②の質問である受け手の受容について、増田氏はイギリスで歯科衛生事業は治療費の支払いをめぐり、一部では教師や看護婦が家族と対立することがあったと述べた。一方、七木田氏は病児のための安価な林間学校や養護施設はむしろ親から求められた一面を指摘した。これを受けてフロアからは人々の受容のあり方は、身体化に加えて内面化の双方から考える必要があるという声があった。また高林氏は精神医療史の立場から、「衛生」や「健康」概念を受容し実践する人々の心性について指摘した。氏は19世紀のイギリスでガラス製水銀体温計を日常で活用しはじめた一般の人々の事例、一伝染病の蔓延を危惧した校長が大量に体温計を購入した事例や体温計を常用する女性が自らの体温の上昇に不安を覚える事例を紹介しながら、新たな医療（体温計で患者の健康状態を確認すること）が与える人々の心理的な影響—この場合は病気を恐れる心—が人々の様々な感情や行為を生み出すことを指摘し、そのような日常的な実践こそ、専門医や為政者の意図を超えた人々の「健康であること」への心性の一端をあらわしていると述べた。

受け手の受容についてはこれまでも当研究会でしばしば議論されたテーマである。筆者は従来の為政者と被支配者、階級、ジェンダーなどのアプローチに加え、高林氏がコメントで述べた人々の心性に迫るアプローチもまた有効であるように思われる。その場合、より人々の感覚や生活に根ざした細やかで多角的な視点が求められる。今後の当セッションの積極的な研究展開を期待したい。

2018年春季例会報告

2018年3月24日(土)に青山学院大学渋谷キャンパス(総研ビル8階 第10会議室)にて、2018年春季例会が開催されました。

今回はイギリス女子教育史、ジェンダー史を牽引されてこられた香川せつ子氏の日本女性の留学経験に焦点を当てた新たな共同研究のシンポジウムを、北村陽子氏（愛知工業大学）の司会で開催しました。共同研究のメンバーである佐々木啓子氏（電気通信大学）が「戦前期日本における女性留学者の概況」を、中込さやか氏（立教大学）が「大江スミのイギリス留学とトランスナショナル・ネットワーク」を、内山由理氏が「上代タノの欧米留学とトランスナショナル・ネットワーク」を、香川せつ子氏が「黒田チカのイギリス留学と男性科学者ネットワーク」を報告された。コメンテイタを辻直人氏（北陸学院大学）が務められた。

この詳細は、以下の報告をご参照ください。

2018年春季例会のシンポジウムを聞いて

北村陽子（名古屋大学）

2018年3月24日に青山学院大学で開催された春季例会では、近代日本の女性研究者の留学経験と現地での経験を比較する共同研究の成果の一端が、「比較女性教育史の可能性を探る—ジェンダー、トランスナショナル、ネットワーク」と題したシンポジウムで報告された。シンポジウムの詳細については熊田氏の参加記にゆずり、ここでは司会者として聞いた全体の感想を簡単に記したい。

香川せつ子氏（西九州大学）の趣旨説明で、女性の高等教育あるいは芸術関連の教育が日本国内で発展するにしたがって、国外で専門教育を受けてたいという女性たちの意欲が高まり、男性に続いて女性も留学する研究者が明治後期から増えたことを指摘している。佐々木啓子氏（電気通信大学）の「戦前期日本における女性留学者の概況」と題した報告では、大正期までの女子留學生の専門分野と渡航先がまとめられている。人文科学系ではイギリスやアメリカ合衆国、自然科学系はさらにドイツ、音楽系ではオーストリアが多いという。これらの女子留學生は、第一世代が留学する際には男子留學生たちがある程度構築していた人的ネットワークを頼ることができた他方で、続く世代のために自分たち独自のネットワークも構築していった。現在もその傾向があるといえるが、日本での指導教官の専門と人的ネットワークが、彼女たち女子留學生の道すじを大まかに決めていた点は否めなかった。

このあと3つの個別事例が報告された。中込さやか氏「大江スミのイギリス留学とトランスナショナル・ネットワーク」、内山由理氏「上代タノの欧米留学とトランスナショナル・ネットワーク」、香川せつ子氏「黒田チカのイギリス留学と男性科学者ネットワーク」である。それぞれ家政学、英文学、植物色素について研究を深めるために留学し、帰国後は女子のための高等教育や平和運動、女性運動など研究分野だけにとどまらず、社会的な参画も果たした人物であったことが明らかにされた。

男子の留學生について研究を進められている辻直人氏が、ある意味牽引役であった男子との違いと類似を指摘するコメントをしてくださったが、個別報告とコメントを聞いて感じたのは、人的ネットワークは男性であれ女性であれ、明治期から大正期は、日本から欧米に出ていくのとは逆の、国外から日本に留学してくる学生・研究者はいなかったのかという疑問である。お雇い外国人を別として、留学していた日本人が、逆に現地での交友関係のなかから、日本に滞在して研究を進める人員を紹介しなかったのかということが気になった。学問分野によっては、日本の研究水準はまだ始まったばかりで、ほぼ知識を輸入している状態のものもあったであろう。しかしたとえば日本の歴史や文化、音楽といった分野は、当時でも国外においてそれなりに関心は高かったであろうし、ある分野の国外（この場合は日本）での受容を知りたいと感じる欧米の研究者もいたのではないだろうか。あるいは日本での受容を知る必要もないほど見下されていたのだろうか。ともあれ、トランスナショナルとネットワークを掲げた本シンポジウムの議論は、双方向的な話題の提供があると、より広がりを見せるのではないかと感じた。

本シンポジウムで扱われた女子留学生と女子の高等教育に関するトランスナショナルな比較研究は、そのテーマ設定自体が大変画期的で興味深いものであり、今後女子による知識移転を介した双方向的なネットワークの解明など、テーマ内容のさらなる発展を期待したい。

シンポジウム「比較女性教育史の可能性を探る—ジェンダー、トランスナショナル、ネットワーク」の参加記

熊田凡子（北陸学院大学）

2018年3月24日(土)青山学院大学青山キャンパスにおいて比較教育社会史研究会シンポジウム「比較女性教育史の可能性を探る—ジェンダー、トランスナショナル、ネットワーク」が開催された。

はじめに、司会の岩下誠氏から、本研究会の趣旨説明がされ、教育及び社会における史的探究、なかでも女性教育史を巡る課題研究の成果報告として本シンポジウムを企画したことが示された。発表者は、香川せつ子氏、佐々木啓子氏、中込さやか氏、内山由理氏、全体とまとめるコメントーターは辻直人氏により、女性留学史におけるネットワークの変容を中心に追究する会が始められた。幼児教育史研究を軸としている本記者にとっては、とても興味深く参加するに至った。

まず、香川せつ子氏が、本シンポジウムにおけるテーマの研究目的と方法を明示した。本研究の目的は、明治初期から昭和戦前期における女性の留学の実態を把握することである。なかでも、本シンポジウムでは、大江スミ（家政学）、上代タノ（英文学）、黒田チカ（有機化学）に焦点を当て、伝記的資料に基づいた言及を行うものとした。人物の伝記的実情を具体的に取り上げながら、その時代に女性が留学することのもつ意味（留学という選択の可能性）、留学経験を通じた変容及び影響（異文化体験による意識変容、帰国後の活動の変化、文化移植・転用）、留学を媒介とするネットワーク（留学を可能にしたネットワーク、留学によって得たネットワーク、留学後に築いたネットワーク）について、分析をした研究報告として、会が進められた。

そこで、女性留学者を個人的にアプローチするまで至るにあたり、佐々木啓子氏が「近代日本の女性留学生の軌跡」について、佐々木啓子作成の「女性海外渡航者リスト」（2種類）を提示し、海外留学をステージごとに、また留学目的種別に区分することによって、女性たちが海外留学及び文化接触において得た知識や成果の傾向を検討したことを述べた。なかでも、日本で最初の女子教育機関においては、アメリカ女性宣教師の派遣によって設立されたミッション・スクールが先行しており、私学留学にはミッションナリーが多く関わっていたと考察している。女子教育に限らず、幼児教育に関しても同様に、ミッションナリーが先行していると考えられるため、今後の追究に期待したい。本研究で取り上げる大江スミは近代学校制度の整備に必要な教育人材養成のための派遣留学者、上代タノは国際交流を深めるための留学者、黒田チカは海外での学問交流を目的とした在外研究員派遣者であることが、提示されたリストより読み取ることができる。佐々木氏作成のリストは、多分野の視点から女性留学の意義に関する検討が期待できる貴重な資料であると伺えた。

次に、各女性留学者における、トランスナショナル・ネットワークの検討を中心に報告がされた。

最初に、中込さやか氏が、「大江スミ」のイギリス留学に着目し、留学目的と成果を確かにする一次史料を提示した。一次史料には、留学申請と、家政学を中心とする教育内容が記されており、大江スミの留学に関する伝記的言及を明記する上で、本史料は根拠を示す貴重なものであると伺えた。そこで、どのようなネットワークが重なっていたのか、そこから発展していったトランスナショナル・ネットワークとは何かを検討した。彼女の生い立ちによれば、大江スミは、東洋英和女学校時代に女性宣教師から刺激を受け、キリスト教信仰者となって歩んできたことがイギリス留学へと結びついている。留学後、大江スミは、東京家政学院の創立に関わり、校長に就

任することになるのである。大江スミは、文部省官僚や政府関係者による留学が実現し、国際的な女性教育者及び女性留学者とのネットワークを得たことが考察された。

次に、内山由理氏が、「上代タノ」の欧米留学の意義とネットワークについての検討を報告した。上代タノの留学の意義は、女性大学人となること及び、平和運動家のキャリアと国際的ネットワークの構築であった。内山氏は、上代タノの生い立ちと伝記的事項を詳細に明示した上で、考察した。特に、上代タノの留学は、恩師である成瀬仁蔵を中心とした日本女子大学における繋がりとウェルズ・カレッジと婦人国際平和自連由盟（WILPF）に導いた新渡戸夫妻が支えたことを強調した。また、上代タノの留学から見る女性の留学とトランスナショナル・ネットワークは、留学前後で得た人的・知的ネットワークであり、それを通じて国境を超えた女性のネットワークを形成していったことが考察された。

最後に、香川せつ子氏が「黒田チカ」について、男性科学者ネットワークに着目し、女性科学者のネットワーク形成についての検討を報告した。日本における女性科学者のパイオニアである黒田チカの学問特に化学研究に関する内容を示す、一次史料（「文部省から東北帝国大学への入学許可の質問状」「女性初の化学会での講演録」）を用いて、女子科学者の位置付けを検討し、史料の内容から当時の状況を示した説得性のある考察にまとめた。また、黒田チカのオックスフォード大学留学時における研究視座と成果が評価され、日本の化学界のエリート男性が女性の学問研究を支持していくことに繋がった経緯が、一次史料（「パーキン教授から櫻井錠二に宛てた手紙」）から考察することができ、男性科学者の国外・国内のネットワークが、女性の科学研究を可能にしたことが報告された。女性科学者のネットワーク形成は第二次世界大戦後であり、黒田チカについての言及はほとんど見られないことから、今後日本における女性科学者の位置づけの明示に期待ができるものである。

これらの研究報告後、本シンポジウムのまとめとして辻直人氏が、3人の女性留学史から見る留学の目的と変容について、自身の研究『近代日本海外留学の目的変容—文部省留學生の派遣実態について』（東信堂、2010年）からの研究展開を含めて、トランスナショナルとは何かを中心にコメントした。

まず辻氏は、本報告の女性留学者たちの関連性について指摘した。キリスト教との出会いがあるのではないかと、それがトランスナショナル・ネットワークに結びついていないか、つまり、キリスト教精神がトランスナショナル的であると言えるのではないかと、という問いである。そこで、辻氏は、自身の男性留学者研究なかでも湯浅八郎と成瀬仁蔵の留学史研究を提示し、特に、湯浅八郎については、湯浅が留学したことによって、キリスト教を再発見し、国際感覚を得ることに繋がったことを明示した。それこそがトランスナショナルなのである。これを受け、本会の報告者及び参加者たちは、国際感覚とキリスト教をつなげる新たな見方を共有することに繋がった。また、辻氏による成瀬仁蔵研究の視座からは、女性留学者らは、留学目的の自覚があったのかが問われた。そこで、辻氏により、成瀬の女子教育観「婦人が自分の目的を自覚する事」の提示があり、女性自身が使命観を持つことに女性留学の意義が見出されるのだと強調された。果して、この3名の女性たちには、その自覚があったのか、留学前後で自覚の変化はなかったのか、その点については、課題である。留学による文化・生活・教育を通じて、女性の中での生き方、役割の変容、ネットワーク形成に結びつき、それを支えていたのがトランスナショナル・ネットワークだったのではないかと、そのようなシンポジウムのまとめとなった。

本記者は、本研究会に初めて参加した。会の開始前から、企画側も参加側も共に、各々の研究を重んじ、1人1人の研究者の研究も人格も含めて尊重されている雰囲気を感じていた。シンポジウムの休憩時にも、研究について、高め合うような交わる空間が創り出され、研究を通じた交流の喜びをつくづく感じ、その後の懇親の時、食事会まで同行した。研究を通じての交流は、本記者にとっては、研究者としての自覚を（研究使命観）を確かめる時に繋がったと感謝している。今後も研究会の発展を祈っています。